

社会教育事業との出会い

そこからドラマが生まれた

三井一代

一 緑区の生涯教育講座との出会い

「生涯教育講座を企画運営する委員募集」の案内が、初めて「広報よこはま」の緑区版に掲載されたのは三年前の五十七年四月。「どんなことをするのか」と緑区役所の社会教育係へ問い合わせると、住民が生涯にわたって学習できるような講座を次年度から発足させたい、ついでにはテストケースとして、本年度は二講座を手がけるが、役所で企画するより受け手である住民のみなさん自身の手でプログラムを組み運営して頂くのが一番と、運営委員公募を行ったという。生涯教育講座運営委員の公募制は横浜市でも

珍らしいケース、よって「住民のみなさんの熱意ある参加をお待ちしています」と大変丁寧な説明をいただいた。

ハハーン、緑区の生涯教育はユニークだ、スゴイノと評価されたい。そのために住民の持っているノウハウを引き出すという遠謀深慮にちがいない。それで「是非、ご協力を」なんておだてているのだ。なるほど。

さて、緑区は横浜市の中心から遠いこともあって、横浜のチベット、文化果てる所と一般に取りざたされているが、田園都市線の開通と区画整理事業によって、沿線住民が急増し、現在三五万二、九九三人（六十年三月）で四十四年十月に港北区から分区した時の人口、一二二万

三、二六二人の約三倍の人口を有する区に発展した。

新しい住民のほとんどが、東京都に職業を持つサラリーマン世帯で、いわば横浜よりも東京に顔が向いている「横浜都民」である。地元不動産会社のPRによれば、田園都市沿線住民の約八割が高額所得者であり、またその八〇%が文化人、知識人で占められているという、一大文化ゾーンということになる。

二 花の中年、準備委員会

運営委員の公募制を考えた役所の思わくには「新住民の文化度拝見」という意味もあつたであろうし、応募者の胸の中

- 一 緑区の生涯教育講座との出会い
- 二 花の中年、準備委員会
- 三 井戸端サークル「虹の仲間」誕生
- 四 高齢化社会をバラ色に
- 五 長生きしてよかった
- 六 かなえてほしい三項目
- 七 「緑区民音楽祭」
- 八 心ふれあう緑区に

にも、運営する面白さもさることながら、「お役所の仕事ぶりをじっくり見聞できるいい機会」と社会教育行政の聖域にやるこび勇んで踏み込んだ人もいよう。かくいう私も、どんなメンバーが集まりどのような企画が立てられるのか「これは面白いぞ」と興味を持って参加した。顔合わせには一四、五人の平均年齢四〇代半ばと思われる花の中年女性が集会。みなボランテニアやサークル活動、消費者運動など主婦業以外に自分を生かす場を持った人たちで、その赤い気炎とエネルギーは「毎夜、ユメでうなされる」と担当職員が述べたほど。ややもすると熱心さの余り、自分の考えを強調し、他を省みないということになりがちだが、

回を重ねるごとにバランスがとれ、職員のマネージメントも効を奏して、秋には「教育」と「女性史」の二講座を開講することができた。

両講座とも、緑区初の生涯教育講座を成功させたいという委員たちの努力が実って大盛況であった。

以来、正式に発足した生涯教育準備委員のほか、母親クラブの代表、婦人のつどいの世話人、緑区民音楽祭の実行委員と次から次へと、社会教育行政とかかわりを持ち、コミュニケーションの輪がどんどん広がり、専業主婦でいられないほど忙しくなった。

三——井戸端サークル

「虹の仲間」誕生

そんな中で昨年一月、高齢化社会を考へよくする井戸端サークル「虹の仲間」が誕生した。

ここ数年來、テレビや新聞で取りざたされている高齢化問題、年金制度の崩壊、老人福祉の後退、看護ノイローゼ、熟年離婚と、正にカラスの鳴かない日はあっても高齢化問題関連記事が報道されない日はなく、その深刻な内容に不安ばかりがあおられていく。しかし「大変だ大変だ」とお役所もマスコミも騒ぐだけで、それを乗り越えるにはどうすればよいの

か、具体策が提言されないのは不愉快このうえないことだ。

平均的主婦の私が考えることはきつと多くの人が同じ思いを持っているにちがいないと「とりあえず、みんなで集まり、悩みや不安を語り合う会をやらうよ」と生涯教育の運営委員会や学習会でかねてより目をつけていたあの人の人に声をかけた。みんな二つ返事で「やるう、やるう」と賛成し、一昨年秋、主婦八人による発起人会が発足した。

名称は、何でも自由に話し合える会と「井戸端サークル」とし、みんなの知恵と努力と助け合いで明日に希望の虹をかけようと「虹の仲間」である。一人では何もできないけれど、みんなで手を取りあい、明日の不安を粉砕しようとチラシを作って銀行や商店、行きつけの美容院や病院に貼付を依頼し、タウン紙にも協力を願った。この辺の知恵は生涯教育の勉強会で入手したノウハウで早速役立った。資金は発起人が千円ずつ出し合い、紙代や雑費をまかかった。

四——高齢化社会をバラ色に

準備期間わずか二カ月という早わざで翌年の一月、発足集会にこぎつけた。地元の総合病院長による記念講演と対話集会であったが、二〇代から八〇歳をこえ

るお年寄りまで六四人の女性が集った。

「チラシを見て、これこそ私の望んでいた会と実感した」「このような会を作っていただけで感謝しています」「これまでの準備のご苦労に対して、せめて手元にあるコピー代をまかなわせてほしい」などの発言があり、カンパの袋が会場を回った。ブツリと手応えのあるカンパを手に、発起人一同感動に胸を熱くしたものである。この時の「人間て、なんて素晴らしいんだらう」というトキメキが、その後の虹の仲間の原動力となりドラマとなって展開されていく。

それから毎月一回、会を開いて仲間づくりと信頼関係の確立に力をそそいでいる。井戸端会議に時間をかけながら、バスツアー、福祉施設見学会、コンサート、バザーなど参加しやすい内容で一年があつという間に過ぎていった。

二年目の今年は、展望として三つの大きな目標をかかげた。一つは、仲間たちのたまり場「虹の仲間センター」づくり、二つ目は情報交換を確実なものにするための「虹のたより」の発行、第三は高齢化社会の諸問題を知識として、しっかりと学習しようと「セミナー虹の仲間」の開催である。準備と平行して四月に絵画教室を開き、専門家の手ほどきを受けて、老人ホームや施設に絵入り暑中見舞いを出す、五月は御前崎にある身体障害児施

設「つくしの家」の見学と、海の幸を食べる日帰りバスツアーを行うなどが決まっている。

五——長生きしてよかった

毎回、少ない時で四〇人弱、多い日は五〇人を超える人が集まり胸のうちを語っていく。親の扶養のこと、息子夫婦との同居のことなど、親せきや近所では口にしにくいことも、利害の伴わない飾る必要のない人間関係の中では安心して話すことができるのだ。すっきりした表情で「第三者の意見が伺えて勉強になりました」と帰っていく。

老いた時、確かに健康もお金も大切だが孤独を慰め合える仲間や友だちがいればどんなに心強いことか。PTAや近所づきあい、職場関係などの必然的に起きたつきあいではなく、積極的に自分の老後、明日を考えて参加した人たち「そういうみなさんと会えることが、とても楽しみだし、虹の仲間のことを考えるとホッと心が安らぎます」とうれしい声が聞こえてくる。

今まで一三〇人を超える人たちとの川会いがあったが、調布市(東京都)の服部照代さんの登壇は一きわ印象的である。確か四回目ごろの例会であったと思うが「私はみなさんにご相談したいことが



会場は一瞬シーンとなり続いて溜息が充満したが、次から次へと意見が出た。一人ぐらしをしている人や、嫁、姑（しゅうと）のそれぞれの立場から、経験談

や率直な考えが述べられて三対七くらいの割合で淋しさに耐えられるなら別居が好ましいという意見が強かった。そして私も「どちらにも天国と地獄、プラス、マイナスがあるのなら、後は自分の好き嫌いで選ぶのがいい、自分で納得して選んだなら思わくどおりいかなくても恨みは残らない、私ならそうします」と。

そして一年後、彼女は息子夫婦との同居を決め、共同生活をするための家を緑区青葉台に建て今年三月末に引越してきた。住みなれた思い出の地を離れて。「調布市に一〇年住みましたが、手芸の会や学習会などは活発でしたが、虹の仲間のような、自分の明日の的をすえ仲間づくりをしていこうという会はありませんでした。その前向きな姿勢と、そういう会が生まれるクリエイティブな土地柄に魅かれ、思いきってまゐりました、どうぞ今後ともよろしくお願いします」と転居のあいさつをされた。

なんとということだろう／そんな力が虹の仲間にあるのだろうか／感動と不安のまざった熱い血が体の中を駆けめぐっていった。

虹の仲間が地域の街づくりや

環境に関心をもちつつ成長し、やがては行政をも動かす力を蓄え、老後をバラ色に変えて「長生きして本当によかった」と思えるような文化とあたたかな人間関係を育てていきたいと思っている。

思えば三年前「生涯教育講座運営委員募集」の案内がきっかけで誕生したといえる虹の仲間。あの時、もし応募していなかったら、今の私も虹の仲間も存在しなかったわけで、たった数行の案内記事との運命的な出会いを、またそのような機会を与えてくれた緑区役所社会教育係に心から感謝申し上げている。

六——かなえてほしい三項目

最後に社会教育事業に参加して、感じたことを付記させて頂きたい。生涯教育講座が終了し役所の思わくどおりに「学習をもっと続けたい」と事後グループが誕生することがあるが、このグループに何らかの形で援助してほしいことが、まず一点。せっかく発足しても、会場がない、講師が呼べないなどの理由から、自然消滅してしまうケースがほとんど。いわば事後グループは、まだヨチヨチ歩きの赤ちゃんのようなもの。赤ちゃんに愛の手が必要なように事後グループにもアフターケアが必要。

生涯教育とうたって、役所の望む方向

で出来たグループ。ケアがよければ、それこそ生涯にわたって学習を続け、生きる支えになるかも知れない。手間ひまかけて応援してください。

第二に講演や催物の参加資格として区内在勤在住を条件にしているが、来る者拒まず方式で希望者を受け入れてほしい。地域わくや縄張りにとどまっていると、まとまりはよいが発展性がなく、輪が広がらない。積極的に呼びかける必要はないが、情報を入手し自らの手で戸をたたく人には、学ぶ機会を与えていただきたいと思う。

第三は全市的な催物については各区别的企画でなく鉄道沿線別に行ってほしいこと。たとえば横浜線沿線、相鉄線沿線、田園都市線沿線などに企画し、関係区役所が協力して実施してもらえるようになれば、交通の便がよく参加しやすいので恩恵が均等になり、バラつきが消える。いくらよい催物でも田園都市沿線住民にとつて、関内や山下町など市の中心まで片道二時間近くかけて参加するのはちょっとムリ。

よって緑区の人たちは音楽や演劇鑑賞は東京でということ、いつまでたっても「横浜都民」の意識が抜けていかない。「まるでミソッカス扱い」という被害者意識も消えない。

七——「緑区民音楽祭」

この盲点をつき、その間隙を埋めるべく発足したのが「緑区民音楽祭、ふれあいコンサート」。横浜市教育委員会後援で、緑区社会教育係が事務局となり、住民有志による実行委員会方式で、企画運営をしている。この四月で三年目に入るが演奏家の出演や出演料の交渉、チケットの販売など、いわばプロモーターの仕事に匹敵する作業を実行委員がすべて手分けして手弁当で行っている。素人ながら、みな音楽好きで、その熱意で世界的に有名なバイオリニストの黒沼ユリ子さ

写真—2 緑区民音楽祭ふれあいコンサート



ん（メキシコ在住）を迎えたり、区内在住のNHK交響楽団メンバーによる「緑弦楽四重奏団」を結成させるなどすばらしい成果を上げている。

さて。話がそれってしまったが、第一の事後グループのアフターケア対策として提言したいことは、財政面は早急には無理としても、少しづつでも予算の計上は是非お願いしたい。また会場の問題は、公立学校の空き教室を使わせてもらおうというのはいかがでし

写真—3 黒沼ユリ子さんを囲んで（緑区公会堂にて）



ようか。毎日、昼間すべての教室がふさがっているわけではないはず。空いている教室を授業に支障のない範囲内で使用できると取り計らってほしい。その上、夜間の使用にもOKができれば、それこそ、夕食後に夫婦そろって「共勉強」「共遊び」が可能になり、名実ともに生涯にわ

たって勉強ができるというもの。これが実現できれば、高齢化問題の難問の一つである熟年離婚も防げるかもしれない。

八——心ふれあう緑区に

三項目にわたって要望を記したが、私を含めて緑区の新しい住民はそれぞれに事情は異なるが、つまるところこの地に骨を埋めるべく、終（つい）のすみかとして横浜の緑区を選び、居を構えたのです。

緑区は生まれて一六年、歴史こそ浅いが、整然とした町並みと豊かな緑を誇る生気あふれた魅力的な街です。やがて、横浜の海の文化と東京の陸の文化との狭間で、互いに影響しあった独自の文化が花開く日がくることでしょう。

もし許されるなら、いついつまでも地域のみなさんと力を合せて、心くだいて一緒に心かようあたたい街づくり・地域づくり喜んで参加したいと思う。

△東急沿線新聞ルポライターV